創刊のコンセプト

手彫切手研究編集担当
高野昇郎

念願の「手彫切手専門カタログ」2007年版の発刊を終えた今、積み残された課題は何か。各方面の識者のご意見を伺いながら、いろいろなことを考えて来た。

そのなかで、表現はさまざまであるが、「手彫切手専門カタログ」を使って行く上でも、手彫切手研究会は、一口で言えば情報の公開が不充分だというご指摘が一番多かった。その象徴的なサブジェクトは、和紙黄2銭と和紙紅4銭の版別資料である。

和紙黄2銭は従来、タイプ別の分類に終わっていたが、前回発刊した1997年版から版別に分類して評価することになった。これは、永年、和紙黄2銭を手彫切手研究会の研究課題として担当して来られた島田達雄氏を中心に、この切手が15面の原版で刷られたとの結論が得られたことを受けている。そして15面の版の図案特徴も一覧表として提示することもできた。しかし、和紙黄2銭の場合は、和紙青1銭のように、すべての切手の所属を解明するところまで行っていないし、その目処も立っていない。それは、黄2銭は封書の基本料金用の切手であったから、青1銭と比較して、ペアが格段に少ないうえ、多くの切手は肉眼で観察し難いという難点を持っているからである。キーとなるシート写真とかブロック、コーナー切手などは、コントラストの強い白黒写真で対応すれば雑作ないが、すべての単片を白黒写真に撮って観察することは現実的ではない。それに、昨今は、白黒写真を撮ることも難しくなって来た。われわれは安直な白黒コピーで対応してきたが、黄2銭は白黒コピーでは巧く撮れるものばかりではないので苦労した。さらに、これを実用に堪える形で複製して開示するとなると、さらに難しい。そのうえ、この白黒コピーも最近はアナログからデジタルに変わり、身近のコピー機で撮ったコピーでは、ルーペでの観察も十分にできない場合が多い。こういう事情もあり、黄2銭に取り組んでもらえるような資料の開示が、不充分のままに終わっているのが現状である。

しかし、最近になって、このあたりの問題点を解決できそうな状況が生まれて来た。詳しくは、別の機会に譲りたい。もっともこの方面の識者であれば、常識化していることとも思われるが、一口で言えば、最近の、コンピュータの発展により、肉眼では見難い黄のみを、例えば青とか黒に変換して見やすくしてコピーすることが、可能になってきた。この機能を装着したコピー機も出現しており、コンピュータの専門家でなくても何とかできる時代になったということである。だだ、個人のパソコンで精度のよいコピーを得るのは、まだまだ、使用機器やソフトの問題もあり、依然として難しい。少なくとも編集子には難題であるが、そう言っていたのでは、いつまでも前に進めないので、市井のコピー機や手元の技術で対応できる範囲でスタートしようと決心した次第である。

ともかく、和紙黄2銭に科せられた課題に答えることができる状況ができつつあるというのが、本冊子の刊行を決断した最大の理由である。

和紙黄2銭の話を縷々述べたが、和紙黄2銭に限らず、手彫切手の収集と研究には、未使用シートあるいは再構成したシートの写真がもっとも重要なツールである。さらに言えば、和紙墨六のようにシート上の位置不明のものが大部分であっもシートを構成する単片などを40位置を集積すれば、シートに準ずる役割を果たせる場合も多い。

この冊子では我々の手元にある資料を、整理出来次第、順次公開し提供したいと考えている。さらに、次の段階としては、シートに関する情報がほとんど残されていない切手でも、こういった集積が、意外に大きな役割を果たすことを、実例で示して行きたい。

最近は、入手難となっている感のある、これまで出版されたシート写真集を、複製して刊行することも求められていると思うが、そのためには版権のことなど、解決しなければならないことが多すぎるので、われわれの手には負えないと思っている。ただ、われわれに可能なものはこの冊子を通じて披露して行きたいと思っている。こういった事情であるから手彫切手の収集を考えておられる方は、機会があればぜひとも既存のシート写真集を確保しておいて頂きたい。また、未使用シートなり、再構成シートをお持ちの方は可能であれ

和紙黄2銭13版（玉なし第1版）

和紙黄2銭の玉なし版という版種別は、市田氏の新版「桜切手」の115ページの第18表に収録されており、版数は2、特徴としては、飾玉なしとあり、未使用は希少とされている。その後、全日本郵趣(1991.5)に島田達雄氏が「和紙黄2銭 - 未知版の検討 (4) -」として、５ページに亘って詳しく解説しておられるので、参照して頂きたい。

15の原版のうちから、この玉なし版を選別することは、「飾玉なし」の特徴に着目すれば、雑作はないが、NタイプがType IIであるものの中に、やや紛らわしいものがあることと、“玉がない”という特徴は、必ず、切手をピンセットでつまんで光に翳して観察することを忘れなければまず、間違う心配はない。

13版は未使用の36枚群の写真が残されており、残りの４枚も再構成されている。その経緯については、全日本郵趣(1996.1)の拙稿＜「和紙黄2銭仮名なし」の再構成の現状と版別法 - 1 -＞を参照して頂きたい。再構成されたpos. 3から6までの4位置が、正しいものであることを示す資料を掲載しておく。

もう一つの玉なし版である15版の34位置は、再構成が終わっており、残り6位置も15版に所属することはほぼ間違いないものを特定している。　13版は1971年に金井スタンプ商会が出版した「F. J. Peplow 日本手彫切手シート・コレクション写真集」に、件の36枚群の鮮明な白黒写真が収載されている（写真番号47、この文献では第5版とされていて、pos. 3～6は第1版の同位置で補完されている）。

13版の36位置については、この写真集を参照して頂くのが、一番である。今回は、坂下泰一氏が完成された再構成シートの青焼きコピーを添付したので、残りの4位置も含めてこれでも版別位置決定は充分可能である。この再構成シートはまさに“本邦初公開”の完成品である。

15版については、既存の資料をできるだけ青焼きに置き換えたものを作成し、次号で採り上げる予定である。

ところで、13版と15版の区別に戻ると、13版のピンホールはType Bであり、15版のピンホールはType Fである。

また、使用時期がはっきりして（例えば、単片でもN1B1タイプの消印が押されているなど）おり、明治6年の使用であれば、間違いなく、13版である。これについては全日本郵趣(1999.10)の拙稿＜「和紙黄2銭仮名なし」の再構成の現状と版別法 - その後の進展その2; 15版（玉なし第2版）を中心に＞を参照して頂きたい。

(高野昇郎)

Pos. 31　玉飾りは全部で16箇所あり、拡大すると玉があるように見える箇所がある場合もある。しかし、ほとんどの箇所は玉なしであり、判断に迷うことはない。透かして見ると判断しやすい。

2	3
10	11

4	5
12	13

6	7
14	

手彫切手　局別・切手別使用例（北海道　5/6）

浜益
洋紙青1銭仮名チ
○ ハママス (浜益)
洋紙黄2銭仮名ロ
○ ハママス (浜益)

（天塩）
増毛
洋紙褐色半銭仮名イ
○ マシケ (増毛)
洋紙紫褐色6銭仮名レ
KG増毛 (黒)
房2銭
○ マシケ (増毛)

苫前
改色茶1銭仮名カ
◎ 御 用 郵便局／天塩国苫前郡 (苫前)
改色茶1銭仮名レ
◎ 御 用 郵便局／天塩国苫前郡 (苫前)
改色緑4銭ブッチType II
KG天塩

（胆振）
新室蘭 (新室蘭港)
房2銭
イフ7 (新室蘭; 新室蘭港)

白老
和紙紅4銭Type I
イフ2 (白老)
房1銭
イフ2 (白老)

勇払
竜200文
□ 勇武津封印 (勇払)
竜半銭
□ 勇武津封印 (勇払)
竜5銭
□ 勇武津封印 (勇払)
和紙青1銭政府印刷
□ 胆振国 郵便役所 勇払郡 (朱) (勇払)
洋紙黄2銭仮名ハ
□ 胆振国 郵便役所 勇払郡 (黒) (勇払)
洋紙黄2銭仮名ニ
□ 胆振国 郵便役所 勇払郡 (朱) (勇払)

苫細
和紙黄2銭Type II
□ 苫細封印 (黒)
和紙黄2銭11版
□ 苫細封印
洋紙黄2銭仮名イ
イフ3 (苫細; 苫小牧)
房2銭
イフ3 (苫細; 苫小牧)

山越内
和紙紅4銭11版
KG山越内
和紙紫褐6銭仮名ヘ
イフ4 (山越内)
洋紙黄2銭仮名イ
イフ4 (山越内)
洋紙紫褐色6銭仮名レ
KG山越内9.6
洋紙紫褐色6銭仮名ソ
KG山越内-.4

千歳
洋紙黄2銭仮名イ
イフ5 (千歳)

紋鼈
洋紙青1銭仮名ロ
□ 有珠郡 郵便取扱所 紋鼈村
洋紙黄2銭仮名ヌ
□ 有珠郡 郵便取扱所 紋鼈村
洋紙黄2銭仮名ワ
□ 有珠郡 郵便取扱所 紋鼈村

（日高）
下下方
洋紙黄2銭仮名ム
KG下下方
改色橙6銭仮名ツ
KG下下方

浦河 (浦川)
洋紙黄2銭仮名チ
KG浦川
□ 浦河 郵便
改色茶1銭仮名ヨ
□ 浦河 郵便 (黒)

幌泉
和紙紅4銭
(変形) 幌泉郡
洋紙黄2銭仮名チ
(変形) 幌泉郡 (黒)
洋紙黄2銭仮名ヨ
(変形) 幌泉郡
洋紙紫褐色6銭仮名ソ
(変形) 幌泉郡
改色茶1銭仮名タ
(変形) 幌泉郡
改色橙6銭仮名ツ
(変形) 幌泉郡
房1銭
(変形) 幌泉郡 (黒)
房2銭
(変形) 幌泉郡 (黒)

沙流
房1銭
○ サル 合 (沙流) (黒)

（十勝）
広尾
洋紙黄2銭仮名ワ
KG広尾

大津
洋紙黄2銭仮名ト
KG大津

「手彫切手専門カタログ」改訂ページ（p. 30）

30

創業布告に掲載されているが遅れて開局された枝道局

局名	国	竜切手	桜切手
横浜	武蔵	★	★
韮山	伊豆	★★★	★★
相良	遠江	★★	★★
新城	三河	★★	
田原	三河	★★	
犬山	尾張	★★	

局名	国	竜切手	桜切手
笠松	美濃	★	★
大垣	美濃	★★	★★
高須	美濃		(★★)
津	伊勢	★★★	
西大路	近江	★★★	(★★★)
八幡	近江	★★	

さらに遅れて開局された東海道周辺局や琵琶湖周辺局

局名	国	竜切手	桜切手
厚木	相模	★★★	
浦賀	相模	★★	★
横須賀	相模	★	★★
松輪	相模		(★★★)
甲府	甲斐	★★★	★★
下田	伊豆	(★★★)	★★
気賀	遠江	★★	
西郡	三河		★★
津島	尾張		★★
内津	尾張	★★	
清洲	尾張		★★
起	尾張	★★★	
横須賀	尾張	★★	★★
岐阜	美濃	★	★

局名	国	竜切手	桜切手
加納	美濃	★★	
竹ケ鼻	美濃	★★	★
上有知	美濃	★★	
関	美濃	★★	★★
高田	美濃	★★	★★
墨俣	美濃		
岡本	近江		★★
守山	近江	★★★	
海津	近江		★★
今津	近江		★★
川原市	近江		★★
大溝	近江	★★★	★★

例外的な地方局

局名	国	竜切手	桜切手
足羽県	越前	★★	
熊川	若狭	★★★	★★★
和歌山	紀伊	★★	★★

評価は希少性を★の数で示し、オフカバーのみ知られているものは（）内に示した。最初の開局地中、岩塚、萬場、神守の３局は未発見であり、舞坂は発見されたと言われているが印影の発表が見当たらず、使用切手も不明である。また、田結荘金治氏により「美川」として発表された印は、中川長一氏により、「熊川」と判定されたのでこれによっている。類似印として、愛知川で使われた地名なし大型検査済印は不統一印とみなしてここには収録しなかった。また、「墨俣」は確認局とされているが、その事情は不明である。

オフカバーを区別せず、消印自体を評価したが、実際の評価はカバーかオフカバーか、あるいは台切手により大きく左右されるのは当然である。また、台切手が桜切手の場合の評価には、ステーショナリー上のものが含まれる。

甲府（和紙朱2銭四周MLL）

（担当：谷　喬）

改訂箇所

「**さらに遅れて開局された東海道周辺局や琵琶湖周辺局**」に松輪（相模）を追加